

那智の滝

那智の滝は、一段の滝として落差が 133 メートルで日本最長です。この滝は 4 世紀から崇拝の場所でした。日本の初代天皇の神武天皇（紀元前 711～585 年）が、船に乗って九州から熊野の海岸に上陸した時に、山の中に何か光るものを見たと言いつたされています。

修験道には、山岳信仰を基本とする民間信仰の苦行を伴う修行が取り入れられていましたが、平安時代（794～1185 年）からここで修行が行われていました。熊野那智大社は熊野古道巡礼で最も重要な神社の一つですが、那智の滝の崇拝に起源を持ちます。那智大社は元々那智の滝のふもとに建てられましたが、那智山の中腹の現在の場所へ西暦 317 年に移動され、1800 年代に再建されました。12 世紀の古い経典が滝の近くで見つかり、それは大社の宝殿（瀧宝殿）で展示されています。

飛瀧神社は熊野那智大社と関係のある小さな神社で、那智の滝のふもとにあります。滝壺から神社へ引いた水を飲むと寿命が延びると言われています。毎月初日に那智の滝に献花が行われます。一年に一度、7 月の那智の扇祭では、熊野那智大社で火祭が開催されます。燃え盛る松明と神輿が本堂から滝の方へ運ばれて、道を清めます。12 体の神輿は、熊野那智大社の 12 体の神を、元々安置されていた滝のふもとへ運ぶために使用されます。

滝の固い岩床は 1400 万年前に、マグマだまりが冷却されて固まったことで形成されました。周りの脆い岩の層は次第に侵食され、1 秒間に 10 トン以上の水量が流れる岩で出来た棚が残りました。熊野那智大社は、美しい三重塔がある那智山青岸渡寺のそばに位置します。那智の滝は、仏教、神道、修験道の信仰をつなげています。